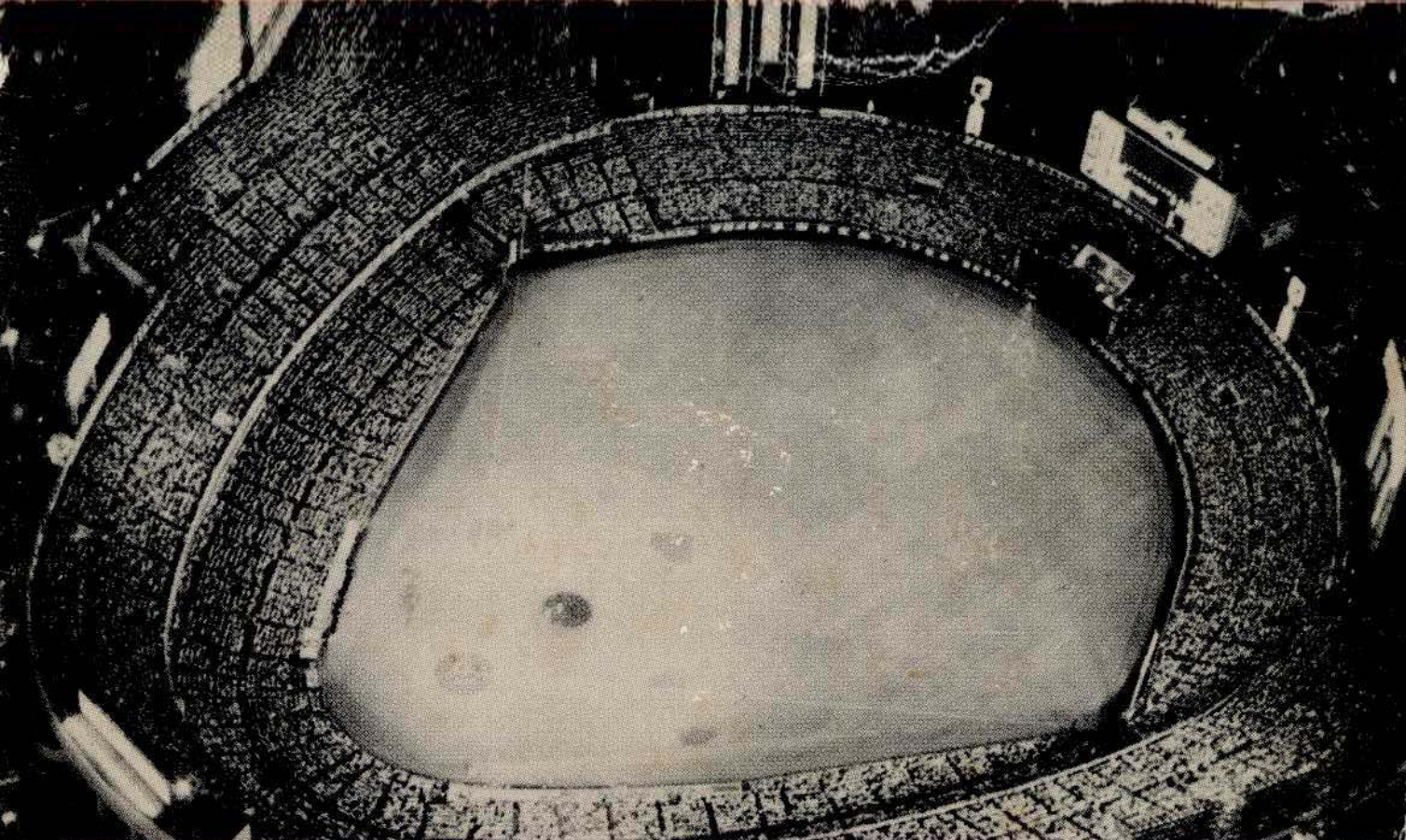




巨人軍陰のベストナイン

上前淳一郎



角川文庫

巨人軍 陰のベストナイン

うえまえじゆんいちろう
上前 淳一郎



角川文庫 5127

昭和五十七年四月二十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七二二―(大代表)

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-326902-0946(0)

巨人軍 陰のベストナイン

上前淳一郎



角川文庫 5127

目次

王に敗れた男

五

「負」の世界のヒーロー

三七

悲劇の背番号15

三八

燃えつきた助っ人たち

一三五

追われた二人の名手

一七三

文庫版あとがき

一三七

成績一覧

一三九

解説

山際淳司 一三五

王に敗れた男

王貞治の本塁打世界新記録に期待が集まった、昭和五十二年のシーズンが始まって間もない五月十四日、東京・渋谷の病院でひとりの男が死んだ。まだ四十歳の若さだったのに、病名は脳溢血だった。

病院へかつぎ込まれる前、男はしきりに「ねえさんと呼んでくれ」と看護婦長をしている姉の名をいった。もう四十歳だというのに、幼児のような心を持ったひとだった。

百八十三センチとも、百八十五センチともいわれたその巨軀は、規格品の棺に入りきらなかった。別れを告げるため蓋をあげた友人たちは、膝が、く、の字に曲げられ、首もかしいでいるのを見た。

木次文夫の死を伝えた翌日の新聞記事につけられた肩書は「元巨人選手」だった。しかし、巨人軍からは焼香者はむろん、一通の弔電も届かなかった。わずかにかつて彼が参加した宮崎キャンプの宿舎江南荘からの電報が、葬儀に間に合っただけである。

代々幡の葬儀場には、松商学園と早稲田大学野球部の花輪がかかげられ、華やかだった彼の球歴をしのばせるだけで、棺はひっそりと野辺に送られていった。

その日のスポーツ新聞の「王記録ボックス」という常設コラムには「756号へあと31本」の

大きな活字があった。

王貞治と、そのライバルといわれた男の対比をこの一日でするのは、あまりに残酷である。しかし、残酷というなら、野球の世界そのものがたとえがたく残酷である。

もし、木次が巨人軍の一塁手のポジションをつかんでいたら、王はどうしていただろう。V9の立役者としていまも活字になるのは木次であり、王の名は誰にも忘れられていたかも知れない。また、もしほんとに木次がV9を支えるホームラン打者だったとしたら、長島茂雄は監督になって木次をどう処遇しただろう。いや、ひょっとすると人気は木次に集まり、長島は空しく巨人軍を追われたかも知れない。

それとも木次は、ほんとにだめな選手だったのか。「悲運の大型打者」の形容詞だけを冠されてこのように退場していくのが、いちばんふさわしかったのだろうか。

彼の死は人びとに、ほんの瞬間ではあったが、そのようないくつかの想像をさせた。そして人びとが想像を楽しむことができるのも、プロ野球の世界があまりに残酷なせいなのかも知れない。

一塁手川上の後継者

木次が巨人軍に入団したのは、昭和三十五年である。当時巨人の泣きどころは一塁手にあった。三十三年のシーズンを最後に偉大な一塁手川上哲治が現役を引退し、誰をもってきてもその穴を

埋めきれるとは思えなかった。

三十四年のシーズンを迎えるにあたって監督水原茂は、ハワイ組の与那嶺要か宮本敏雄を一塁に入れるしかあるまい、と考えていた。

王が入団してきたのはこの年だが、水原は彼を投手として使うつもりでいた。前年、三十三年の日本シリーズで、巨人は手早く三連勝したものの、あとの四試合を西鉄の鉄腕稲尾和久にひねられ、球史に残る敗退をしている。その苦い思いが、水原に投手陣の補強の必要を痛感させたはずである。

当時巨人のエースは藤田元司だった。三十三年には二十九勝している。しかし、すでに老いた別所毅彦、大友工は勝星を稼げず、若い堀内庄、安原達佳はそろってこの年十四勝どまりだった。水原は期待の目でキャンプの王のピッチングを見た。しかし、落胆せざるをえなかった。どこといって悪いところはない。フォームは安定している。ただ、あまりに球が遅すぎた。

「おい、ちょっとバッティングをやってみろ」

水原はいった。

打つほうには、なかなかいいものを持っている。よし、これを外野に回そう、と思った。けれども、守備練習をさせてもう一度監督はがっかりする。足が遅かった。

投手にも外野手にも使えないこの左打者に、残された場所は一塁しかなかった。オープン戦で

使ってみると、ホームランをぼんぼん打った。これはいけるかも知れない、と開幕試合から一塁、七番におくことになる。

だが開幕から二十六打席、王はヒットさえ打てなかった。二十七打席目の初安打が国鉄戦での決勝本塁打、というのがいかにも王らしいエピソードだが、それからまたぜんぜん打てなくなり、しばしばスタメンからも外される。

五月初め、王が後楽園のベンチを暖めているころ、神宮では早大の五番打者であるもう一人の一塁手が、一試合に二本、通算四本目のホームランを打っていた。野球ファンの話題はこの六大学の怪物に集中し、王のことは口の端にさえのぼらなくなっていた。

王を引っこめて一塁には、与那嶺が使われた。しかしこの二世選手にも衰えはかくせなかった。夏になると再び水原は王を出場させるようになる。

そのシーズンが終って、王の打率はわずか〇・一六一、本塁打七本にすぎず、三振がヒットの倍以上あった。十九歳の若者に、注文するほうが無理というものだろう。しかし、即戦力になる一塁手がいたら、この並以下の成績では出番はなかったに違いない（巨人入団当時の打撃成績は二二九頁参照）。

ただ水原は、再び王をスタメンに入れてからは、そのトレードマークにさえなっている辛抱強さで、打てない一塁手を使い続けた。

「おまえ、バットを振らなきゃだめだよ。振らなきゃ当るわけがないじゃないか」
王の三振は見送りが多かった。そのたびにベンチで水原は叱った。はい、はい、と新人はこつくりをする。

小言を聞き終わると監督のそばに坐って、つぎは誰が注文をつけられるか、じっと聞き耳を立てている。

ふむ、やっぱりこれはものになるかも知れない——水原は思った。ほかの打者がいわれることまで吸収しようとしている若者のやる気を、監督は買う気になったのである。

長島以来のスラッガー

ともかくも、木次が入団する前年の巨人軍の一塁は、そんな状態だった。その年巨人はリーグ優勝するが、日本シリーズでは杉浦忠の前人未到の四連投にあり、南海にストレート負けを喫する。

フロントの目にはこれが、捕手と一塁手に人がいないためだ、と映る。

この年から藤尾茂に代わって森昌彦がマスクをかぶるようになっていて、これも水原がインサイドワークを高く評価して使っている選手だったが、フロントにはそれがわからなかった。森と王はいっしょくたに、だめな奴ら、と思われたのである。

昭和三十五年のシーズンを前に、巨人軍は投手の堀本律雄（立大―日通）、捕手の佐々木勲（明大）、野口元三（平安高）、それに一塁手木次文夫の入団を発表する。ドラフト制度などないころのこと、弱いところをいっぺんに埋めてしまおう、という金に糸目をつけぬ補強で、この四人の契約金だけで七千万円かかったと取沙汰とりざたされる。木次のそれは二千万円だった。

皮肉なことに、この四人のうちものになったのは、契約金がいちばん安いといわれた堀本ひとりだった。立大時代杉浦のひかえだった彼は当時無名に近く、ほとんど前評判は立たなかった。だが、その年最多勝の二十九勝をあげて新人王になったのである。

人を食ったようできて、打者の間をはかってすばっと速球を投げ込む、味のある投手だった。ただ、翌年からはぱっとせず、巨人在籍三年で大毎へ移っている。

四人の中でもっとも騒がれたのは木次であった。なによりも毛並がよかった。信州の名門松商学園でも、早大でもクリーン・アップを打った人である。

その図抜けた長打力は、早くから全国に知られていた。昭和二十八年、松商学園は四年連続夏の甲子園代表になっているが、二年生の木次はこのときから左翼手としてレギュラーに入っていた。一年上に、のちに巨人入りする投手の堀内庄がいた。

二十九年も甲子園に出場する。信越大会決勝の対丸子実戦まるこで、三番一塁手木次は左翼スタンドに本塁打を打ち込んだ。

「大きなホームランでした。彼は長野県で初めての、これまで誰も見たことがないようなロングヒッターでしたよ。私は生徒に短打主義を徹底させるほうでしたが、木次だけは別扱いで、好きなように打たせていました」

当時監督をしていた胡桃沢清は、昨日のことのように覚えている。信越大会の打率は〇・四三一であった。

甲子園では一回戦で中京商（この夏の優勝校になった）とぶつかり、7―6で負けたが、一回表木次は中山俊丈（のち中日）から中堅越えの大三塁打を放って先制点を叩き出し、ファンスカウト連をうならせたものであった。

早大では四年間に通算七本の本塁打を神宮のスタンドに叩き込む。これは当時長島の八本の記録につぐもので、大型打者木次の名はますます高くなった。卒業直前、昭和三十四年の秋のシーズンの打率は、〇・三一一であった（早稲田大学在籍当時の打撃成績は二二九頁参照）。

この年のスカウト合戦の焦点は、木次に絞られていた。巨人、大洋、阪急が執拗に彼を追った。とくに巨人のフロントは、川上の後釜（木次は右打者だったが）にどうしてもこのスラッガーがほしかった。

積まれた契約金二千万円（年俸二百四十万円）は、二年前に巨人入りした長島より上だったといわれる。前年高校生としては破格とされた王の契約金は千八百万円だ。つまりこの時点で巨人

のフロントは、王よりも木次にはるかに大きな夢と期待をかけていたのである。

運命かえた一枚の紙切れ

ところで、木次の経歴について年次が一つ食い違っていることに気づかれただろうか。

彼は昭和二十九年、高校三年生として甲子園へ行った。そのまま早大入りしていれば、大学卒は昭和三十四年でなければならない。しかし、彼が卒業したのは三十五年なのである。

この一年の差は、早大の受験票を忘れて試験場へ行くという、思いもかけぬミスから生まれた。いまは東京六大学の入試もうるさくなつて、スポーツ選手が志望の大学へ入りにくいことは江川卓の慶大受験失敗の例からもわかるが、当時はおおらかなものだった。

有名選手にはゲタをはかせる、つまりはじめから一定の得点が与えられる仕組みになっていて、形式的に答案さえ出せば合格できた。むしろ選手をほしいのは大学側であり、世間の手前たちだけ試験を受けさせた、といったほうが当たっている。

しかし、受験票を忘れてきたとなると話は別である。木次は試験場へ入ることができず、当然入学できなかった。

木次が入ってくるものとばかり思っていた当時の早大野球部監督森茂雄は、受験票の一件を聞くと泣いて怒ったという。しかし、ほかの大学へやるわけにはいかない。木次はまず聴講生とし

て早大へ通い、一年後に正式に入学することになった。

両親が教育者の家庭に末っ子として育った彼には、どこかおっとりしたところがあった。これを、ぼんやり、といいかえる友人もあるが、ともかくも大事な試験の当日に、このおっとり、ないしはぼんやりの面が出た。

こういうミスを犯すところがすでに、わずかな注意、不注意の差で優勝劣敗が決まるプロ野球の世界で生きられない原因になっていた、とまで評するむきもある。

しかし、彼がプロで大成していたら、受験票の一件はむしろほほえましいエピソードとして残ったはずで、それとこれとは別であろう。ただ、敗れたものについては、どのような挿話も決してほほえましく語られることはない。

一方、松商学園関係者の中には、森監督とは別の意味で、この一件を口惜しがるむきが少なくない。たとえば前出の胡桃沢だ。

「つまり、王選手との入団のタイミングの問題なんです。もう一年早く卒業していたら、王と一緒に巨人へ入団していた。そうしたら木次の人生は違っていたと思います。たった一枚の紙切れを忘れたことが、今日の悲劇につながってしまったんです」

これは、非常に興味のある話である。川上が抜けたばかりで誰もいない一塁へ王と木次が一緒にやってきたら、水原はどうしただろう。

高校、大学と一塁手のキャリアがあり、しかも六大学で長距離打者として実績のある木次が、ちょうど前年の長島三塁手がそうだったように、当然のこととして一塁に入っていたかも知れない。

そして、水原が王を辛抱して使ったように木次を常時出場させていれば、この巨漢もまた花開いていたかも知れなかった。長島だってデビューからはなばなしかったわけではない。公式戦初の試合で、彼は国鉄金田正一投手に連続四つの三振を食わされたではないか。

木次が少しずつプロの水に馴^なれていく間に、王はどうなっただろう。投手としては球が遅く、外野手としては足が遅い。たまに代打に出れば見逃しの三振ばかりする——こういう若者が生きていける場所は、巨人の中にはなかった。

この日に、水原はただ笑うばかりでなにも答えなかった。野球に「たら」はないのである。しかし少なくとも、王に遅れてやってくるのではなく同時にスタートしていれば、木次がぜんぜん違った道を歩いたことは確かだっただろう。

王をおびやかしたライバル

一年遅れてもまだ、木次は巨人のフロントにとって、のどから手が出るほどほしい選手だった。川上の陰の名一塁手岩下守道がつけていた背番号15が与えられ、早大の先輩広岡達朗がマンツ―